第１回しまくとぅば次世代実践方針検討委員会
議事概要

日時：令和８年９月１日(火)
午後１時～午後３時
場所：國場ビル 12 階 会議室

１．委員会次第

１ 開会

２ あいさつ（沖縄県文化観光スポーツ部文化スポーツ統括監 高宮城邦子）

３ 事業及び委員会について
(1) しまくとぅば普及推進計画（第２期計画）について【参考資料１】
(2) 令和６年度までの検討と県の取組について【参考資料２】
(3) しまくとぅば次世代継承方針事業の概要とスケジュールの概要について
【参考資料３】
(4) しまくとぅば次世代実践方針検討委員会設置要綱【参考資料４】

４ 委員長及び副委員長の選出について

５ しまくとぅば次世代実践方針検討委員会の公開について【参考資料５】

６ 前提事項の確認について
(1) しまくとぅば次世代実践方針検討委員会における「しまくとぅば」の定義に
ついて【資料 1】
(2) 県内のしまくとぅばの現状について【資料２】
(3) 整備内容の活用者等について【資料３】

７ 協議事項
(1) しまくとぅば次世代実践方針検討委員会で検討する教育体系の枠組及び名称について
【資料４】
(2) しまくとぅば教育（仮）の目的について【資料５】
(3) しまくとぅば教育（仮）の目標及び効果について【資料６】
(4) しまくとぅば教育（仮）における「言葉の選択」の考え方について【資料７】

２．参加者

委員参加者

委員（敬称略）	所属
狩俣　繁久	琉球大学 名誉教授
山下　直	専修大学　　国際コミュニケーション学部　日本語学科　教授
又吉　里美 （オンライン）	岡山大学 教育学域 准教授
盛口　満	沖縄大学 学長
銘苅　健	浦添市教育委員会 教育長
柴田　義之	沖縄県教育庁義務教育課　室長
宮城　達也	第２期しまくとぅば認定講師・元校長・義務教育・ 不登校児童生徒支援員
嘉数　道彦	沖縄県立芸術大学 音楽学部 琉球芸能専攻 琉球舞踊組踊コース 准教授
東大濵　剛 （オンライン）	第３期しまくとぅば認定講師・ しまくとぅば普及団体「スマムニ広め隊」隊長・学習塾経営

事務局

高宮城　邦子	沖縄県文化観光スポーツ部 文化スポーツ統括監
大嶺　一治	沖縄県文化観光スポーツ部 文化振興課 しまくとぅば普及推進室　室長
國場　明美	沖縄県文化観光スポーツ部 文化振興課 しまくとぅば普及推進室　主幹
高良　博文	沖縄県文化観光スポーツ部 文化振興課 しまくとぅば普及推進室　主査
渡口　真貴子	株式会社サーベイリサーチセンター（受託事業者）

３．会議経過・内容

開会にあたり、高宮城文化スポーツ統括監による挨拶、事務局による事業及び委員会についての説明があった。

その後要綱第 2 条第 3 項に基づき委員長に狩俣委員、副委員長に銘苅委員長が全会一致で選出された。

しまくとぅば次世代実践方針検討委員会について、原則情報公開することが決定された。

議事の内容は以下のとおり。

≪３ 事業及び委員会について≫

(2) 令和６年度までの検討と県の取組について

（質疑応答）

柴田委員

- 令和 5 年度、6 年度の取組が記載されているのが確認でき、しまくとぅば委員会があったことは理解できたが、令和 7 年度は具体的にどんな取組があり、この令和 8 年度のスケジュールが策定されたのか、いつ、どんなふうに決まっていったのかという経緯を教えてほしい。

事務局（國場）

- 令和 6 年度は、一律に沖縄県内の小中学校へしまくとぅば教育を取り入れることは難しいという結論に至った。その際、しまくとぅば教育に協力いただける学校に講師を派遣してはどうかという委員の提案を受け、令和 7 年度は、しまくとぅば普及推進室から各学校にお手紙を送り、しまくとぅば講座に協力していただける学校については講師を派遣した。それがクラブであったり、総合学習であったり、国語であったり、社会であったりする。令和 8 年度も引き続き同じように声をかけているところである。令和 5 年度、令和 6 年度の検討委員会の結論の課題を受け、その課題を解決すべく、しまくとぅば次世代継承方針事業を立ち上げ、学校で教えるためには、教育の目的・目標に当たるもの、何のために、どれぐらいの程度のものが必要か、小学校ではどの程度必要かということも検討していきたい。

柴田委員

- 前提として、しまくとぅばの継承は学校でやるべきという結論になっているのか。

事務局（大嶺）
学校ありきという結論にはなっていない。

≪６　前提事項の確認について≫

宮城委員
- 前年度行ったアンケートの「学校の授業科目に加えること」では、授業以外の活動で取り組んでほしいという回答が一番多いが、この授業以外の活動というのがよく分からない。学校で行うものは全て授業であり、この辺りをどう受け止められているのか、回答されているのかが不明である。
- クラブ活動は授業である。

事務局（大嶺）
- 一般の方に聞いているため、学校以外で取り組んでほしいという捉え方。例えば家庭や学童保育、あるいは社会教育をイメージして回答しているかと思われる。

狩俣委員長
- 授業以外の活動というのは、学校の授業以外の活動ではないか。学校外でとなっていない。例えばクラブ活動は授業以外とはならないか。

銘苅委員
- 授業以外という捉え方だが、指導要領などにそぐわないため、例えばクラブ活動なども含むのではないかと思う。

宮城委員
- そこまで理解して答えている人はあまりいないかと思う。

事務局（大嶺）
- 詳しい説明をした上で聞けば、銘苅委員の言うような答え方になるかと思う。

嘉数委員
- クラブ活動が授業という感覚がないため、クラブ活動と普通の国語、算数と違う時間が学校にあるのではと、この設問を見て感じた。

盛口委員

- 質問項目として授業以外の活動というのは非常に曖昧で、誰がどう捉えているか不明だが、「学校以外の活動」であれば理解しやすい。現状だと両方の回答が含まれている可能性がある。

事務局（大嶺）

- 意識調査を2年に一度行っており、今年度また取り組むため、質問項目を検討していく。

柴田委員

- 回収率が34.8%とあるが、目標としては何パーセント程度を目指し、34.8%で十分と捉えているのか。

事務局（渡口）

- 当初30%以上を目標とし、結果として34.8%、統計学的に必要な1,000サンプルを満たし、問題ない数値が出ている。

≪7　協議事項≫

(1) しまくとぅば次世代実践方針検討委員会で検討する教育体系の枠組及び名称について

【委員会の役割】

狩俣委員長

- 資料4の11ページ、3体系の比較にあるような大枠を決めていくということでよいか。

事務局（大嶺）

- 資料4の11ページの3体系の比較にあるようなことの大枠を決めていくことでよい。

狩俣委員長

- 資料4の9ページにある小学生、中学生、高校生、あるいは10ページ年齢層別分野、これに学校種、それぞれの学年ごとに、どのような内容をどこまで教えるかの枠も決めたいという理解でよいか。

事務局（大嶺）

- 教員の方が理解しやすく導入しやすい内容にしたいと考えており、10 ページのように、小学校の社会の学習指導要領に関連付けて、どのような内容を教えることができるのかを具体的に示せるとよいと考えている。

狩俣委員長

- しまくとぅばを今のところ教えられていない。教えてる先生はいるかもしれないが、体系的には教えられていない。教えるべきなのではというのが私の個人的な考えであり、一番確実な方法は学校だが、簡単にはできない。ではどうしたらよいか考える、その最初の一歩がこの委員会だと考える。
- 教育審議会が地域ごとの緩やかな部分をつくってもいいんのではないか議論がなされたと聞いてるので、もう少し余裕を持った、あるいは地域ごとに裁量が活かせるような学校教育が始まるのではないかと。その見通しを持っているから、今から用意しておくのが、この委員会の最初の一歩になると思っている。

【目的・目標】

狩俣委員長

- 資料 4 の 5 ページ、これは日本語教育ですが、具体的には金融より日本語教育に近いものをつくっていくことになるかなと。例えば A1 の「はっきりとゆっくり話してもらえれば、自分、家族、すぐ周りの具体的なものに関する聞き慣れた語や、ごく基本的な表現を聞き取れる」、それをしまくとぅばで、といったことになると考えられる。
- 語学教育としてしまくとぅばを学校に導入するということは、必ずしも賛成ではない
- 語学教育として導入するかどうかは、全ての父兄、県民の理解を得ることが課題になると考えられる。
- 地域教育としてのしまくとぅば教育は、有効な方法だと思う。沖縄県内の全ての児童生徒に知っておいてもらいたい内容を取り上げる。

山下委員

- 日本語教育に倣ってしまうと、評価やテストなどによって、できる・できないが明確になり、かえって学習意欲の低下につながるおそれもある。しまくとぅば、実用性より言語文化的な側面のほうが強いと思う。言語文化は、基本的に興味関心を持ってもらい、継承していくという考え方である。興味関心をメインとしつつ、どの程度技能的な面を身につけさせるべきか、いわゆる継承をどのレベルまで持ってくるかを考えていくことがポイントになるのかと思う。

柴田委員

- 評価を取り入れることで、こどもたちが本当にこの言葉をつかいたいと思うようになるのかという点が懸念される。そのため、言語を文化として継承していくためには、学校教育だけでなく、社会教育の役割も非常に重要であると考える。

銘苅委員

- しまくとぅばをこどもたちに教えるということは、評価や評定ではなく、こどもたちが興味関心を持ち、慣れ親しむことが一番大切だと思う。つかっていて面白いとこどもたちが感じながら、この言葉つかってみたいと思えるような取組を進めていくことが必要である。あまりこの表にこだわる必要なく、何々せねばならないと限定的にならず、もっと弾力性のある方が必要だと考える。

嘉数委員

- 言語として学ぶという点では、英語の授業と同様のものではないかと考えている。日本語に直せない感覚が、おそらくどの地域の言葉にもあり、その感覚をなくしちゃいけないというのが一番重要な、今後考えなくてはならないところである。そのため、こうした言葉や感性、感覚があることをこどもたちに伝えていくには、言葉を通じて学ぶ必要があるという側面もある。

柴田委員

- できる・できないは何をもって判断するのか、整理してたほうがよいと考えている。継承というのは、必ずしもこどもたちだけなのか、学校教育を中心とした取組だけでは、恐らく行き詰まるので、広い意味で、継承とは一体何なのかというところからもう少し幅広く取り組むことで、一歩一歩前に進める。

狩俣委員長

- しまくとぅばを勉強したこどもと、しまくとぅばを勉強していないこどもでは、実はしまくとぅばを勉強したこどものほうが平仮名、片仮名の読み書きの習得が早い。こうしたメリットを明確にする必要がある。日本語としまくとぅばの表現の違いを身につける、言語感覚の鋭いこどもたちをつくることができる。しまくとぅばを教えることは、単に話せるようになるだけでなく、そういう賢い子を育てることにつながる。

【活用の場】

宮城委員

- この会議もそうだが、学校の中でしまくとぅばをどう教えるかというのを前提に協議が進むのか。

事務局（大嶺）

- 学校でも希望する学校や先生がいれば、これを活用してくださいという姿勢は持つが、必ずしも、学校で教育してほしいというわけではない。
- 中級の人に何をどの程度教えたらいいか、上級に教えたらいいのか、実は中身がこれまできちんと整理されているものがない。

狩俣委員長

- しまくとぅばの継承をずっと続けていくためには、学校以外ないと思っている。なぜなら、お金がかからない。
- 熱心な地域とそうでない地域、そうでない地域のしまくとぅばはなくなっていいのか。日本中の児童生徒に日本の言語、文化を教える、日本の歴史を教えるのと同じように、沖縄県の県内にある学校に通うこどもたちに、最低限これは教えないといけないものの一つとして、しまくとぅばを入れる。学校でやらない理由はないかと思う。

宮城委員

- 本当にやるとするなら、県に依頼し指定校をつくり、どのようにしまくとぅば教育を取り入れるかを現場の先生方に考えてもらうほうがよいかと思う。
- 現場を経験しているので分かるが、学校の現場にしまくとぅば教育を取り入れることは、すごく困難。例えば、文科省が沖縄に特区を置いたり、それこそ研究していくための予算を組まない限り、難しいと思う。
- 総合の時間に取り入れるのも難しいと思う。AI も参入しており、学校はとにかくいっぱいいっぱいである。
- 今できる精いっぱいがクラブ活動である。

嘉数委員

- 興味関心を持ったこどもたちが専門的にしまくとぅばを学んでいきたいとなるような、その感覚に親しむ場所がないというのが一番大きな課題。

銘苅委員

- 社会教育の中で、その地域の伝統行事や伝統芸能、獅子舞や棒術などそういったものから、しまくとぅばをつかうことにつなげ、地域や地域のこどもたちと結びつける方法があるのかなと思う。

狩俣委員長

- 理科の時間や家庭科、音楽の時間でもしまくとぅば教育はできると考えている。

柴田委員

- 学校だけではできないというところが現状だ。学校や家庭や地域と連携しながらでないと、学校運営すら今難しいという状況。地域や、保護者もしまくとぅばの継承に関わらないと難しいというのは実感として持っている。
- 社会教育の中でもしっかり取り組み、役割分担しながら、学校は何ができるのか、社会、地域は何ができるのかとか、そういった枠組みで捉えていくほうが前に進むと思う。

狩俣委員長

- 学校を核にした地域教育でなければと思っている。言い方が悪いが、こどもをだしにして地域社会を巻き込んでいく。大人の教育をこどもの教育を通してやるのが一番よいかと思っている。学校の先生は転勤して変わるので、それでも可能な地域教育が必要。

宮城委員

- しまくとぅばを指導できる教員をそれぞれ配置するぐらいの位置づけが必要。教員もプラスアルファで、各校にその文化関係の方を配置するか考えなくてはならない。

盛口委員

- 理科で考えると、自然に行くのが一番いいが、お金のあるこども、余裕のあるこどもは、親が意識的であれば行けるが、そうじゃないこどもは行かない、行けない。学校の持つ意味は、みんなが等しく同じ経験ができるということが一つあると思う。どんな機会にしまくとぅばを教室に持ち込むか、とにかく触れる機会、そこが一番。そこで全部できるわけではなく、そこだとみんなに広くわたるというのが一つ。
- もう一つは、先生たちにこれを義務化するとかなり負担になると思われる。理科の授業の中で、物を持っていったほうがこどもが喜ぶので、こういうことをやったら面白いという提案ができると良いと思った。

山下委員

- 要は持続性のあることをやっていくには、学校をある程度巻き込まないとできない。将来的に、全てできればよいが、初めはできるところから始めると思う。どこが解決されていて、どこが解決されていないのかが整理できると話が進めやすい。例えば、もう既に読本ができているが、指導法がないようなところが、ボトムアップ的に。年間時数やどの教科で取り組むかは全体の枠組みが必要なので、トップダウン的にやっていく。一つのアプローチだけではなく、様々な複雑なアプローチがあると考える。

柴田委員

- 一点気をつけなければならないのが、教育課程を組むのは学校であり、トップダウン的にこれをやりなさいというのは恐らく難しい。
- 現実的に考えて、前提として授業の中でやるところを、少し緩やかにしていかないとなかなか難しい。先生たちも多種多様にいるため、必ずしも授業で取り組む前提でやると、苦しくなるかと。授業以外にも、例えば放課後家に帰ってからこどもたちが自分で興味を持ってつかえるようなものなどを、幅広く緩やかに考えていくほうが現実的である。

【対象】

盛口委員

- 指導要領を出してはいるが、学校で必ずしも教えるという体制がない以上、小学校低学年で学ぶこどももいれば、高校から学ぶこどももいるわけで、その段階を追うのは難しいと思う。単純な教科の指導要領になぞらえられないつくり方をしなければならないと考える。

柴田委員

- 金融教育を学齢期で分けているのは、社会教育的な視点が入っていると考える。「小学校で」ではなく、「小学生の年齢」では、「中学校の年齢」ではというような、社会教育の中で学校ではどういうことが教えられるかという立てつけになっている。

【教材】

嘉数委員

- 伝統文化とか各地域の伝統行事とか各学校のその場所に、教材があると思う。各地域のそれが継承されている人達を巻き込まないと難しい。

銘苅委員

- 以前、県からしまくとぅばの読本が配られたが、使い方が分からないというのが現場の声だった。しまくとぅば教育を取り入れたい先生のために何か手伝えることがあれば、学校で読本を使う課程なら、教員が分かる指導案等を準備するのも一つの手だと思う。

又吉委員

- STEAM 教育という方法があり、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、アーツ、マースマティクスの頭文字を取ったもので、その創造性教育と結びついたものとして、アメリカなどで先進的に行われている。自然科学とアートが結びつき、その枠組みを使

った形で、言語と文化、自然、生活のような形で、創造性も含めながら、学校教育になじむ形の枠組みをつくっていくと面白いかと思う。しまくとぅば版 STEAM のようなもので、学校へのアプローチもできないかと考える。

盛口委員

- 理科教育に携わっているが、沖縄の大学生や高校生は、とにかく身近な自然を全く知らないし興味がない。要するに、しまくとぅばに対して興味がないのと同じように、周りの自然に対して全く興味がない。俳句の授業で季語を教えても、なぜ沖縄の季語という発想には至らないのかと思うことがある。和語、漢語、外来語って授業をしても、ウチナーグチがそこと結びついていない。そういったものをつなぎ直すしまくとぅば教育をすると、さらに広がりができるのではないかと思う。

狩俣委員長

- 全てのしまの、全ての方言のテキストをつくればいいと思っている。テキストの脇に QR コードをつけ、録音を撮り、それをタブレットで生徒に見せ、発音して、優劣はつけない。

嘉数委員

- 教材というものに対し、こどもたちが親しみやすい、取り組みやすいプログラムが開発できるといいのかなと思う。音楽発表会や、文化祭、学芸会などで、各地域のウチナー芝居をし、与那国ならこの言葉になる、自分たちで体験する、少し調整するなど、テキストやプログラムの開発も一つの教材に当たるかと思う。なるべく沖縄の、地域の伝統芸能、音楽や踊りなどを交えたプログラムがつくれたら、より一層言葉も含めて多様な文化が学べる一つの教材ができるのではないかと考える。

東大濵委員

- 芸能など、そういう民謡が八重山は盛んなので、それを絡めたしまくとぅばの教育はやるべきだし、替え歌で教えるというのは大賛成である。今実際そういう教え方をしている。学校で押し付けるのは難しい。民謡を習いたいという子は結構多く、古典民謡のコンクールや、受験者が結構いる。内地からも多くいるので、そういう方たちを巻き込まないと継承活動はうまくできないかと思う。

以上